

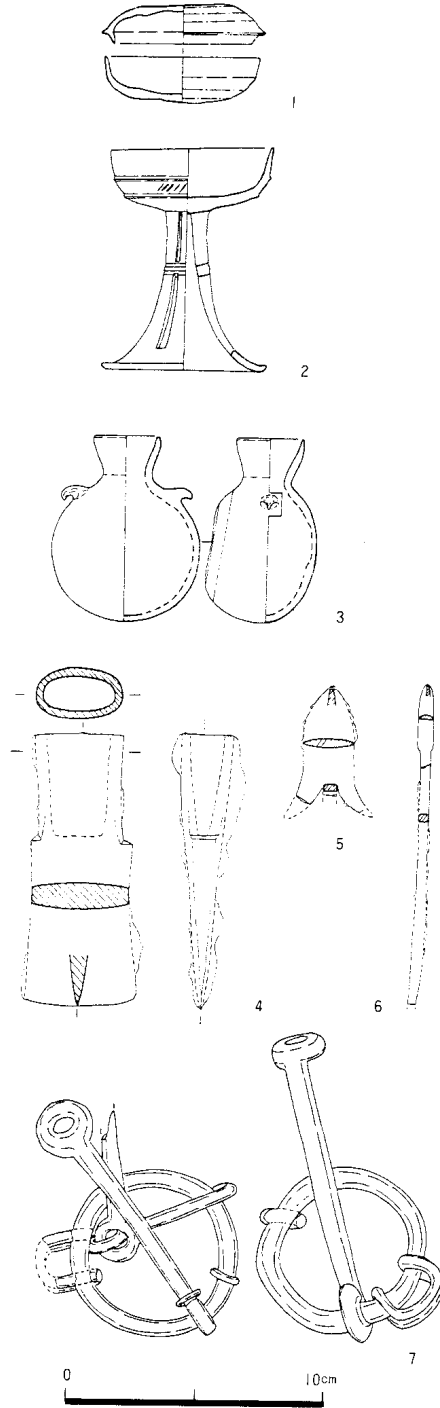
古墳時代になってからは前時代よりも一層鉄製農具が普及して、犀川盆地の今川流域を中心にして喜多良川・高屋川・末江川・松坂川それに畷川の流域の耕地化は著しく進展し、各地域に集落の形成が行われたと思われるが、全体としてこの時代の生活に関連した遺跡の出土は少なく、この時代を具体的に解き明かすことはできない。その中において、最近調査されたタカデ遺跡（木井馬場）や末江遺跡（末江）はこの時代を考えるうえで貴重な遺跡と言えよう。

一方この時代を象徴する古墳については、犀川盆地を取り囲むように各地域に古墳群が分布しているが、しかしそのほとんどが盗掘を受けていて、調査された古墳群は少なく、この面からの解明も困難となってい

る。このように極めて限られた資料ではあるが、犀川町域の古墳時代を眺めることとする。

犀川町の主な古墳群を挙げると、花熊古墳群・木山古墳群・谷口古墳群・大熊古墳群・上大村古墳群・山鹿古墳群がある。あとは前出の河川に沿った小平野の山麓部に小グループを形成したものが点在している。これら古墳群はそのほとんどが六世紀以降の古墳時代後期から終末にかけてのものが多くようである。現在のところでは四世紀の古墳は見られず、五世紀の古墳には長迫古墳（久富）がある。しかし前出の古墳群の中には墳丘の低い小円墳などもあり、この中には古いタイプのものがあることも十分考えられる。前方後円墳も姫神古墳（木山）・本庄古墳（本庄）・大熊古墳（大熊）・上大村古墳（大村）の四基があるが、しかしいずれも全長三〇m前後の小型であり、六世紀代のものと考えられている。今のところ町内の畷川に沿った地域には前方後円墳は見当たらない。

第54図の2 隼人塚古墳出土品



1 杯(蓋・身) 2 高杯 3 提瓶 4 鉄斧 5 鉄鎌 6 鉄鎌 7 馬具
(行橋市教育委員会 「隼人塚古墳」行橋市文化財調査報告書第12集 1982より)

五 犀川の古墳時代

第55図 山鹿地区古墳群



畿内の大和政権の勢力が伸張してきて、周防灘沿岸部に前方後円墳の築造が始まる四世紀には、大和政権の首長連合に連なるような有力な首長はこの町域には発生しておらず、この時期の前方後円墳も見当たらない。

この状況は五世紀になっても変わらず、後半になって長迫古墳（円墳）が見られるが、盆地の西方一帯に開ける平野部を一望できる位置にあり、石室は畿内系の竪穴式石室の手法を残しながらも、横穴式石室手法も取り入れた竪穴系横口式石室となっている。出土遺物には短甲・直刀・鏡などがあり、この時期に犀川盆地北部一帯に勢力を持つ首長であったことが考えられる。しかしこのあとこの古墳の南方六〇〇mに位置する古川大塚古墳が系譜的にすぐこの古墳に連なるかどうかは今と

ころ不明である。

六世紀になるとこのような今川中流域の内陸部にも小型ながら前方後円墳が築造されるようになるが、それぞれ周囲には大小の円墳群があり、その群の中の一つとして登場する。この時期になって盆地内各地域に新しく成長してきた有力首長を、大和政権が支配機構の末端に位置づけて、その勢力に相応した前方後円墳の築造を認めたものであろう。特にこの時期からは前出のような地域にまとまった形で群集墳の形成が見られるようになるが、なかでも山鹿古墳群と谷口古墳群では顕著である。山鹿古墳群の場合（第55図参照）、東西二〇〇m、南北一五〇mの範囲に二七基の古墳があり、盗掘を受けたものは少ないが、比較的大型の円墳が多い。一方、谷口古墳群の場合、東西三五〇m、南北二〇〇mの範囲に二七基（ほかに消滅したものの約一五基）の古墳群が見られ、すべて盗掘を受けているが、六世紀中葉から七世紀の終末ごろまでの石室が変化を見せながら構築されており、後期の古墳の移り変わりを知らうえから貴重な群集墳と言えよう。特に六号墳は単室で胴張りが見られ、腰石上に小角礫をドーム状に積み上げ、さらに後室の入り口の袖石に楣石を架して天井石との間に二〇cmの窓が作られて、この地方では特異な様相を呈している。この古墳群と松坂川を挟んで展開する木山古墳群も後期の大型の円墳が群集し、注目すべき古墳群である。

このように爆発的ともいえる群集墳の形成は、一世代で教基以上の古墳が築造されるようになった結果であり、この時期になって今川水系を中心とする盆地内での農地の開発がなお一層進み、生産力も高まる中で地域ごとに有力な家父長層が台頭してきた結果、このような階層までがこの時期大和政権の個別支配の枠に組み込まれて、古墳の築造を許され

るようになった結果であろうと考えられる。

中でも谷口古墳群と木山古墳群とに挟まれた松坂川下流の扇状地先端部には七世紀の終わりから八世紀の初めごろになって木山廃寺が建立されるが、この地域に系譜的に成長してきた大型の首長墓の見られないことからすれば、これらの古墳群や姫神前方後円墳を築造してきたこの地域での新興の勢力がさらに大きく成長し、この時期に寺院の建立に向けてのエネルギーが結集されていった結果ではないかと考えられる。

次に古墳時代の人々の生活についてタカデ遺跡を例に見ると、本遺跡は祓川中流域（木井馬場南部）右岸の低い河岸段丘上の集落であるが、古墳時代の竪穴住居跡三六軒が出土している。このうち四軒は古墳時代中期、あとは古墳時代後期から終末期にかけてのものであるが、住居の平面は方形・長方形・正方形の順に多く、中期の住居を除けばその多くが北辺中央の壁際に竈が作られている。（第11表参照）

出土した土器はほとんどが日常雑器であるが、土師器の碗・甑・甕・壺・鉢・高杯、須恵器の杯・甕・壺・碗・高杯などがある。（第11表参照）

このように古墳時代になっても人々は弥生時代とあまり変わらない竪穴住居に住んだが、ここでは出土品から見ても特に貧富の差・身分差は見られない。近くには水田が営まれていたであろうが、このような住居小群は単位集団とよばれ、血縁的なつながりを強くもった世帯共同体とされるが、ここから北北西約七〇度を隔てた祓川対岸に、祓川流域では南限の照安寺古墳群（古墳時代後期）終末、小石室）を築造した集団であろうか。末江遺跡も同じような遺跡であり、この時代このような住居小群が犀川町域の各水系に沿って点在していたことであろう。

第10表 犀川の古墳出土品（明治期）

遺物名	出土品	備考
甲（短甲） 1	仲津郡花熊村	
轡 1	〃 木山村	
轡 1	〃 〃	
轡 1	〃 花熊村	
轡 1	〃 〃	
鏡、みずお	〃 花熊村古墳	
鉄剣 1	〃 木山横穴	
鉄剣 1	〃 花熊塚穴	惣長1尺8寸2分
刀装各種 5	〃 花熊村古墳	
紡錘車 1	〃 花熊村	馬ヶ岳古墳
鉄矛 1	〃 木山村	目釘残り
鉄鏃 10	〃 花熊村	花熊村古墳中発見
鈴 3	〃 花熊村古墳	
須恵器 1	〃 木山村	
須恵器 1	〃 花熊村	花熊村塚穴
須恵器 1	〃 木山村	
須恵器 2	〃 木山・花熊村	木山塚穴、花熊塚穴
須恵器 1	〃 谷口村	谷口村塚穴
須恵器 2	〃 谷口村	
須恵器 2	〃 花熊村	花熊村塚穴
曲玉 1	〃 大村	大村本陣塚穴

(一) 犀川の古墳出土品（明治期）

福岡県立歴史資料館の館蔵本「豊前・筑前其他出土考古品図譜」に豊前国京都郡花熊村・木山村・谷口村・大村などの古墳から出土した遺物の記録があり、図譜作成者は不明ながら、明治中期ごろの発見地・遺物の種類などがわかり、さらに前記の村々の古墳が開口されていたおおよその時期、またその古墳の築造時期をおぼろげに推定する資料として貴重であろう。

記録されている古墳の開口は明治二十一年を中心としたところであり、

これらの村々の古墳にとどまらず京都・行橋地方の古墳群の大多数はこのころ以後の開口が多いと思われる。

出土品は土器・紡錘車・曲玉を除けば甲冑・馬具・武器が多く、古墳時代後期の古墳からの出土と思われる。これはこれらの地区に現存して開口する多くの古墳が後期のものであることと符合している。(第10表参照)

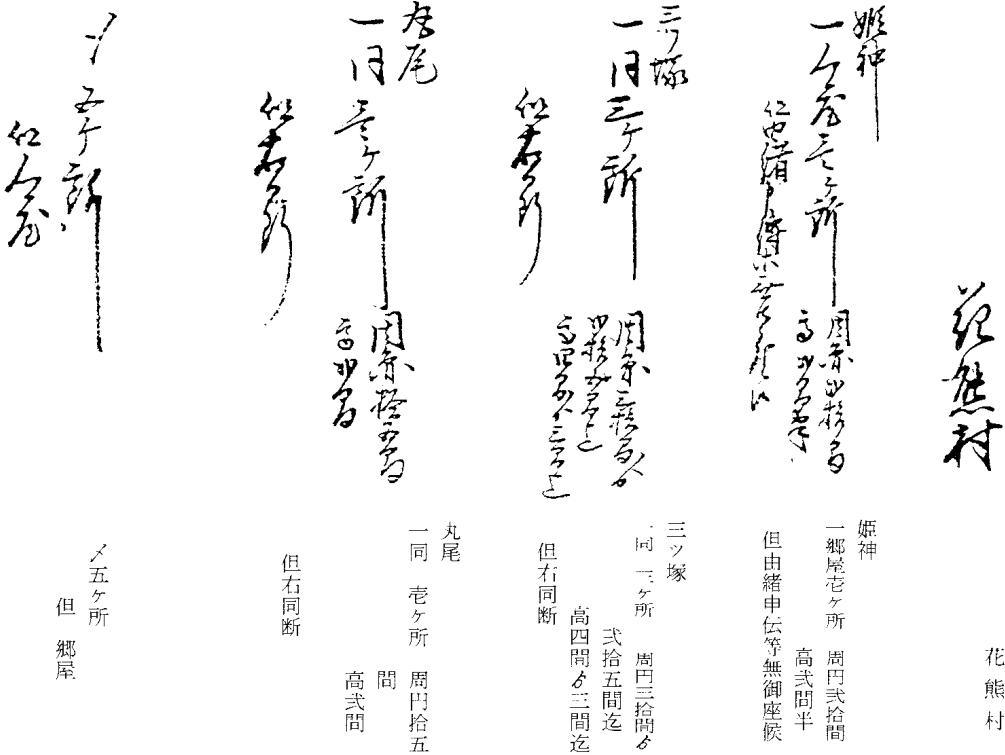
(二) 明治初年の古墳分布調査

明治四年(一八七二)に政府は古墳(当時は郷屋とよぶ)の調査を行っている。犀川町域の一部(内垣村・木井馬場村・木江村・上高屋村・下高屋村・犬丸村・横瀬村・上伊良原村・下伊良原村・帆柱村・扇谷村)が節丸手永、あとの村々は長井手永に属していたので、それぞれ節丸手永大庄屋、長井手永大庄屋の記録の中にその調査書の写しが残されていた。

名称は「陵塚郷屋墓御調子ニ付書上帳」となっている。報告書の雛型が村々の庄屋に示され、それに従って調査が行われ、大庄屋がまとめて報告書を作成して提出したものらしい。

この報告書を見ると、全体的には現在確認されている古墳分布数より少ないが、これははっきりわかる高塚のみを数えたものとも思われ、いわゆる墳丘の低い古墳は見落としていることが考えられる。しかし現在でも確認できていない場所に古墳が報告されていたり、また現在では既開発されて山地や丘陵の見られない場所の消滅した古墳群が記録されているので、今後の分布調査などにとっても貴重であり、また消滅した空白地帯の古墳群の復元にとっても貴重である。

村々の調査は次のようになっている(一部のみ所収)。

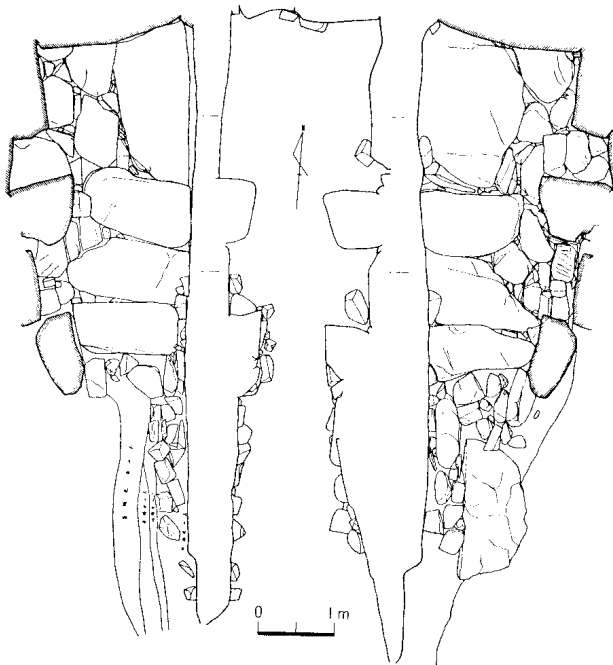


木山村

善正塚
一 郷屋ヶ所 周門三拾三間
高六間
但由緒申伝等無御座候
前
一 塚老ヶ所 周門式拾五間
高四間半
但右同断
兩ヶ所
一 石塚老ヶ所 式内老間半四方
但木森之中ニ御座候
景行天皇尼之鏡之中申伝、
石塚ニ埋御座候鏡を取候
得者
崇り村方牛馬等ニ相障申
候
一 姫神
一 姫神老ヶ所 式内老間四
方
但小松之中ニ三尺四方之
小屋毎年掛替、社家へ相
頼被仕文候、姫神与申唱
候ニ付、往古姫之由緒共
ニ可有御座哉、此処木伐
候得者崇候様申伝候、委
敷由來者申唱無御座候
×四ヶ所 内老ヶ所 郷屋
同式ヶ所 塚
同老ヶ所 小屋掛

一 郷屋ヶ所 周門三拾三間
高六間
但由緒申伝等無御座候
前
一 塚老ヶ所 周門式拾五間
高四間半
但右同断
兩ヶ所
一 石塚老ヶ所 式内老間半四方
但木森之中ニ御座候
景行天皇尼之鏡之中申伝、
石塚ニ埋御座候鏡を取候
得者
崇り村方牛馬等ニ相障申
候
一 姫神
一 姫神老ヶ所 式内老間四
方
但小松之中ニ三尺四方之
小屋毎年掛替、社家へ相
頼被仕文候、姫神与申唱
候ニ付、往古姫之由緒共
ニ可有御座哉、此処木伐
候得者崇候様申伝候、委
敷由來者申唱無御座候
×四ヶ所 内老ヶ所 郷屋
同式ヶ所 塚
同老ヶ所 小屋掛

第56図 谷口大無田古墳石室実測図

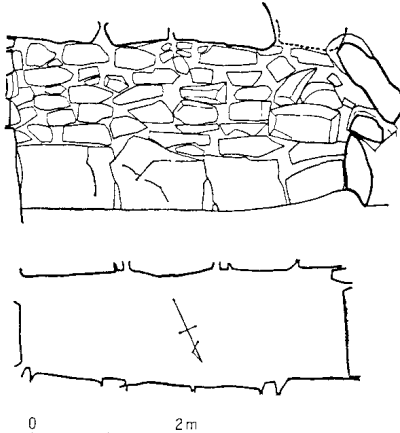


(三) 発掘調査された犀川町の古墳

谷口大無田古墳群

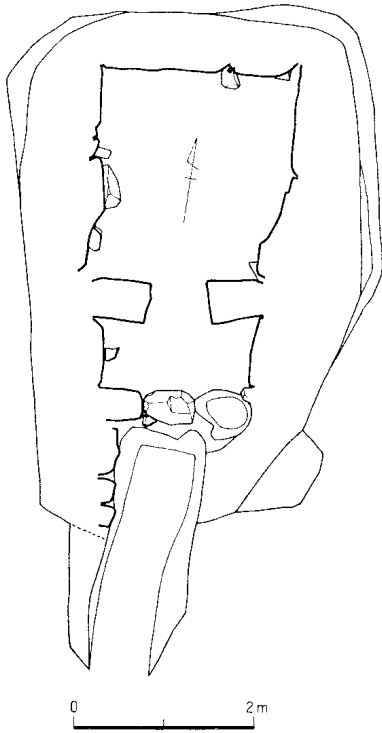
大無田の大無田池西側の丘陵上に南北に並んだ三基の古墳群が見られたが、その一番北側に位置した本古墳群中では最大の古墳である。昭和四十九年、木山庵寺推定地の保存盛り土工事のための採土によって消滅することになったために調査が行われた。現在は工場用地となり、この古墳群はすべて消滅した。(第56図参照)

第57図 長迫古墳石室実測図



(『日本の考古学』Ⅳ古墳時代(上)河出書房 1966より)

第58図 谷口3号古墳石室実測図



△本古墳の規模と遺物▽

墳丘径：南北一四・七^{メートル}、東西一・二^{メートル}

墳丘高：南側裾部からでは二^{メートル}、尾根筋に近い北側で七〇^{センチメートル}

石室：複室の横穴式石室

・主軸長：七・二^{メートル}(羨道端 後室壁)

・後室長：二・二^{メートル}、幅：一・九^{メートル}、高さ：二・三^{メートル}

・前室長：一^{メートル}、幅：一・八^{メートル}、高さ：一・八^{メートル}

※前室・後室ともに玉砂利の敷石の形跡が認められる。

遺物：前室東側壁上部と羨道部が盗掘を受けて開口し、石室内は攪乱されて

遺物はほとんど検出できない

・羨道部・墓道部：攪乱土中から須恵器俵形壺・甕

・石室内：鉄製馬具残片一(前室床面)

・墳裾に近い墓道左側小凹地より：須恵器高杯・甕・杯破片

△本古墳の時期▽

六世紀後半と推定

(犀川町教育委員会「木山廃寺跡」一九七五より要約・引用)

長迫古墳

末江川と高屋川に挟まれて南北に延びる丘陵の先端部に位置する小円墳。昭和三十二年(一九五七)に九州

大学によって調査された。詳しい報告書は見当たらないが、墳丘は径一

〇^{メートル}、高さ二^{メートル}。図面から推定すれば単室の長さ約四・三^{メートル}、幅約一・

四^{メートル}の長方形の石室であり、竪穴系横穴式石室とされている。(第57図参

照)

遺物：短甲(横板鉄銚留式)、直刀、刀子、鉄鏃、小玉、鏡

△本古墳の時期▽

五世紀後半と推定

谷口古墳群

三基からなる古墳群で、西方にある谷口古墳群の主群からやや離れた北側に位置し、この古墳群の一支群と

考えられる。扇状地の低丘陵上にあつたが、もともと水田などの造成時

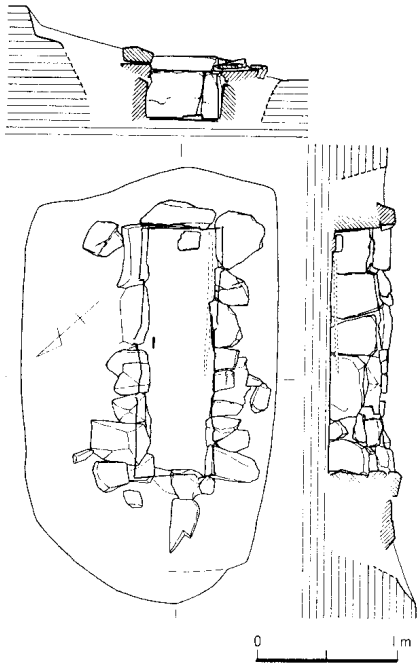
に墳丘は大きく削られていた。調査後、圃場整備のために消滅した。

(1号墳)

盛り土(封土)はなく、わずかに石室の一部を残す。遺物も出

上しない。石室は長さ約二・九五^{メートル}、幅約二・一^{メートル}の小石室で

第59図 1号墳主体部実測図



れた古墳は五基で、そのほか祭祀跡と考えられた竪穴三基、焼土坑六

木山平古墳群

（犀川町教育委員会「木山廃寺跡」福岡県京都郡犀川町所在遺跡の調査報告
一九七五より要約・引用）

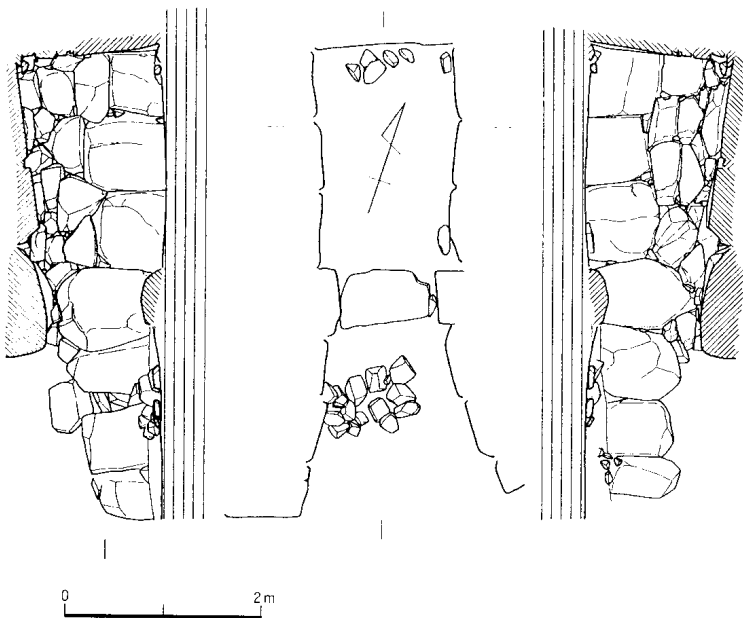
本古墳群は犀川町の北部にそびえる御所ヶ岳南東部
斜面（中原牧場内）に位置する。昭和六十二年（一九

（3号墳）

墳丘が削られて石室の一部を残すが、もともと複室の横穴式石
室であったことがわかる。石室の規模は全長約三・九^{メートル}、後室

（奥室）の長さ約二・三^{メートル}、幅約一・二^{メートル}、前室の長さ約〇・
八^{メートル}、最大幅約一・七^{メートル}で、これに約一^{メートル}の羨道がつく。遺物
の出土はない。（第58図参照）

第60図 2号墳主体部実測図



基、土坑一基の調査も行っている。

（1号墳） 墳丘：消失。東側高位斜面に一边四^{メートル}、深さ〇・五^{メートル}ほどの

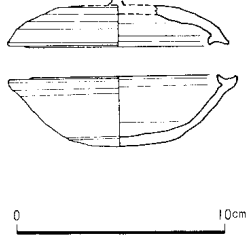
「コ」字形周溝が残存。

主体部：竪穴式石室（石棺系）

内法：一・七×〇・五五^{メートル}

基底になる石材を立てて使用し、上位の石材を小口積
みとする。壁体は最高で〇・七^{メートル}残存。

第61図 2号墳出土
土器(杯)実測図



(3号墳)

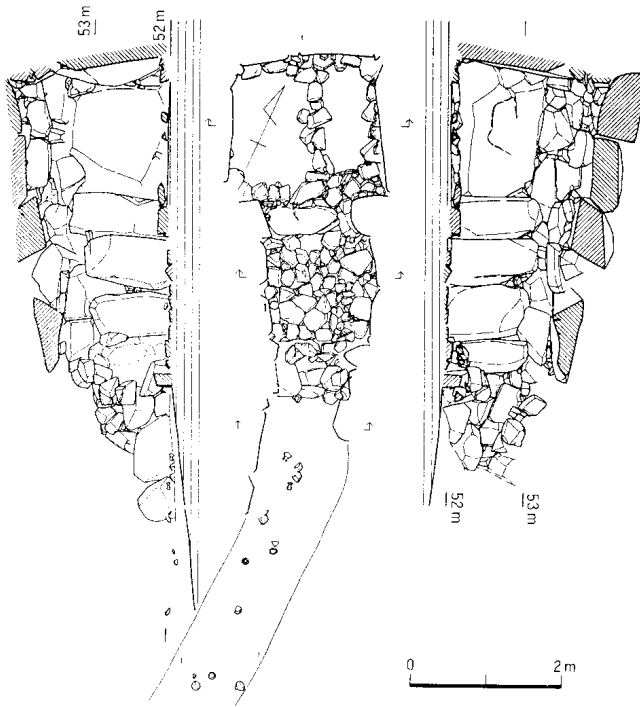
遺物：須恵器が墓道より(杯蓋片・杯身)
上師器(高台付碗)：十世紀後半〜十一世紀前半)
青磁(龍泉窯系)：十
一世紀後半)
時期ほか：築造は七世紀前半こ
ろ
※土師器・青磁の時期ごろに盗
掘か再利用。(第60・61図参照)
墳丘：径八・八メートルの円墳で周溝

(2号墳)

遺物：大刀：切先の一部を欠く(長さ九九センチ、柄長一六・四
センチ、背の厚さ〇・八〜一・〇センチ)
刀子：切先の一部を欠く。残存長七・四センチ。柄に比べ
て刃部が小さく、使用減りと思われる。
時期ほか：五世紀代の築造と考えたい。
副葬品が南半にあり、南半の石材が大きく、枕状の
石材が南小口にあるなどから、頭位は南に求められよ
う。(第59図参照)

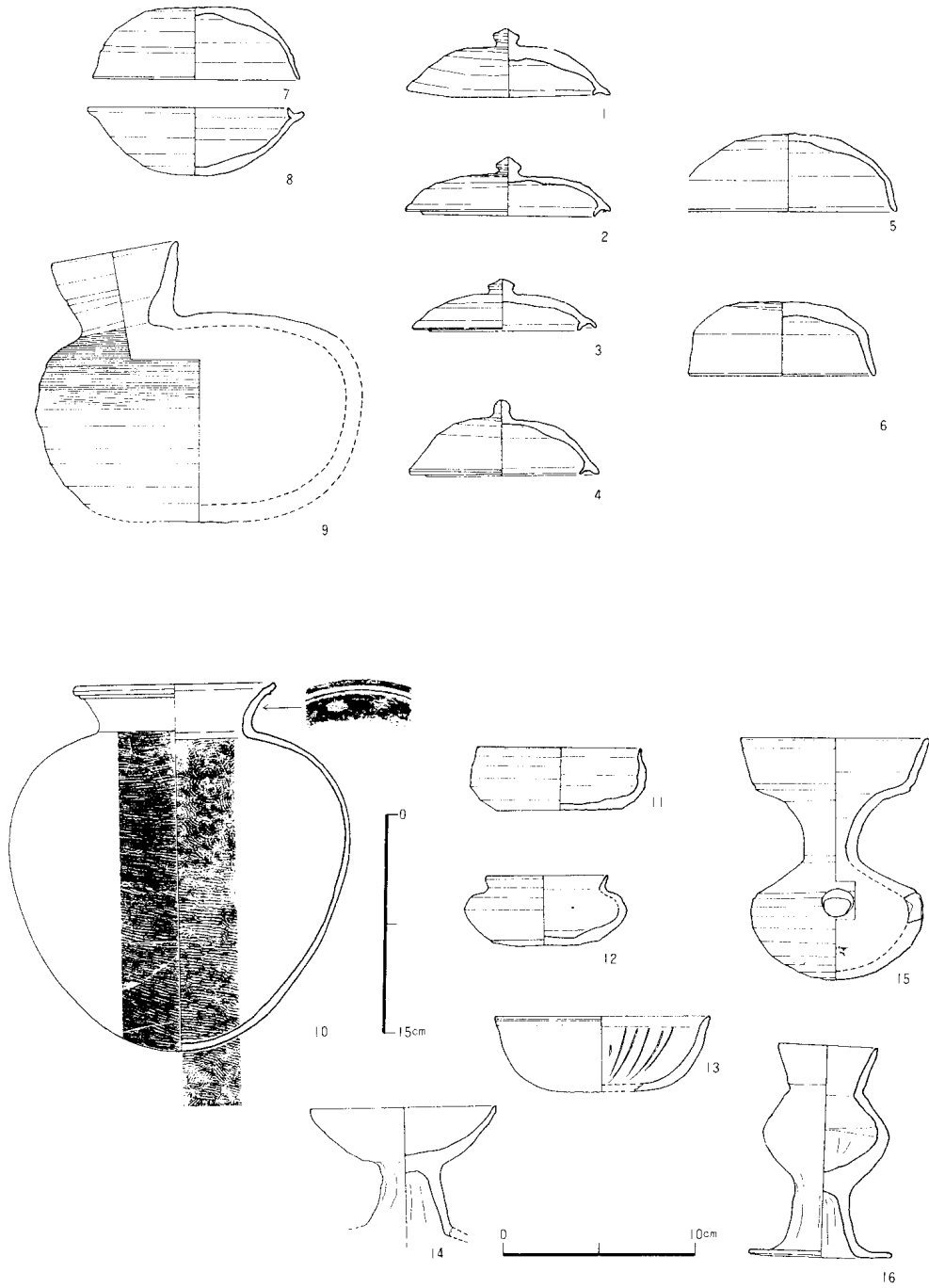
墳丘：盛り土は最高二・二メートルを残す。低位・西辺・南辺を中心
に人頭大の角礫を積んで、封土の流出を防ぐ工夫をす
る。一辺は約六・五メートル。
主体部：単室横穴式石室(二・三×一・四メートル)前面に約二メートルの
羨道。天井の下面はほぼ水平。
玄室高は最高で一・四メートル。入り口部で低くなる。
高さ二分の一強を腰石で占め、目地は通らない。角礫
を用いた敷石が一部に残る。
玄室の袖石は小さく張り出し、石室中最も丈高な石材
を使用する。

第62図 3号墳主体部実測図



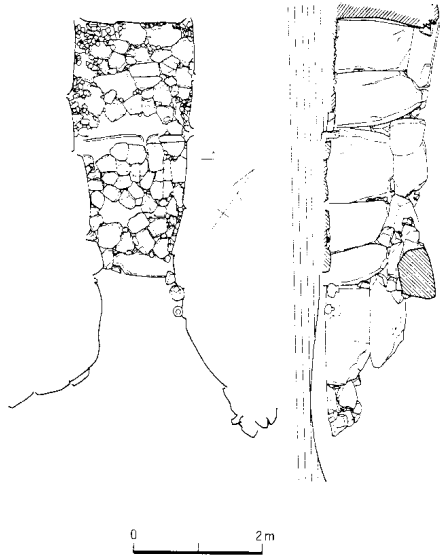
遺物：鉄器 刀子二本(後室)
がない。
前室は一・三×一・三メートル。敷石は良好、円礫は敷かれ
て置く。
後室は一・九×一・八〜二メートル。三壁は高さ一メートル強の巨
石を腰石とし、その上に三〜四段の礫を高さ一・八メートル
まで積み上げる。床面は角礫を敷きつめた上に小円礫
を置く。
主体部：複室横穴式石室(全長五・四メートル)
がある。

第63図 3号墳出土土器実測図（一部）

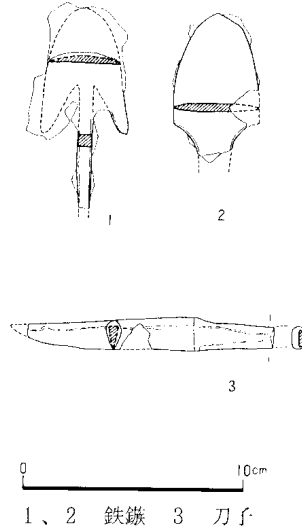


1～7 杯蓋 8 杯身 9 横瓶 10 大甕 11 杯 12 小壺 13 碗（土師器） 14 高杯（土師器） 15 甕 16 脚付壺（土師器）

第65図 4号墳主体部実測図

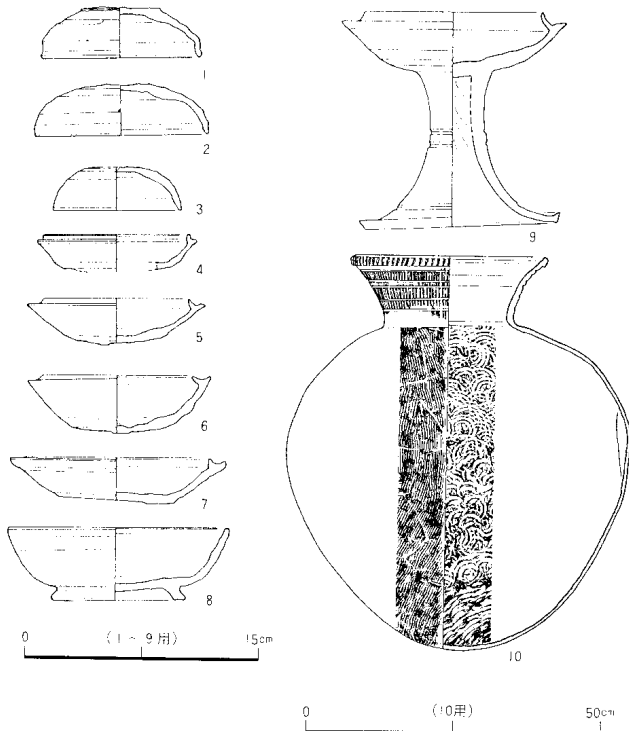


第64図 3号墳出土の鉄器
実測図 (一部)



鉄鎌(前室・墓道)
※金銅製刀装具(縁金具? : 前室)
須恵器杯蓋(前室)
須恵器杯蓋・杯身・小壺・長頸壺脚部片・甕(墓道)

第66図 4号墳出土品 (一部)



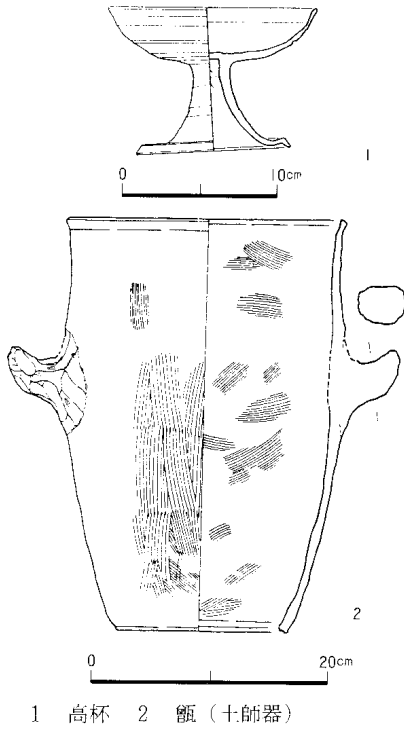
1 杯身(?) 2 杯蓋 3 壺蓋 4~7 杯身 8 高台付杯
9 高杯 10 大甕

(4号墳)

須恵器杯・平瓶・大甕(周溝)
土師器碗・小型高杯・長頸壺?(墓道)
時期：七世紀初頭～中ごろ(第62・63・64図参照)
墳丘：径一・二mの円墳。周溝を持つ。
主体部：単室横穴式石室であるが、中ほどに仕切りがあったらしい。

奥壁から框石で約三・五m、奥壁幅一・八m、支門幅一・二mの梯形プラン。袖石の張り出しは小さく無袖

第67図 SX1出土土器実測図（一部）



（祭祀遺構）

SX1：長さ一九センチ、幅約四センチ、深さ一センチの細長い落ち込み。遺物：浮いた状態で出土。石器：砥石

※5号墳については省略する。

後平ごろに求められる。（第65・66図参照）

時期：上限は七世紀初頭。追葬の最終は高台付杯により七世紀

上師器高台付杯・皿（石室前庭部）

部）

須恵器直口壺・平瓶・高杯・大甕・高台付杯（石室前庭部）

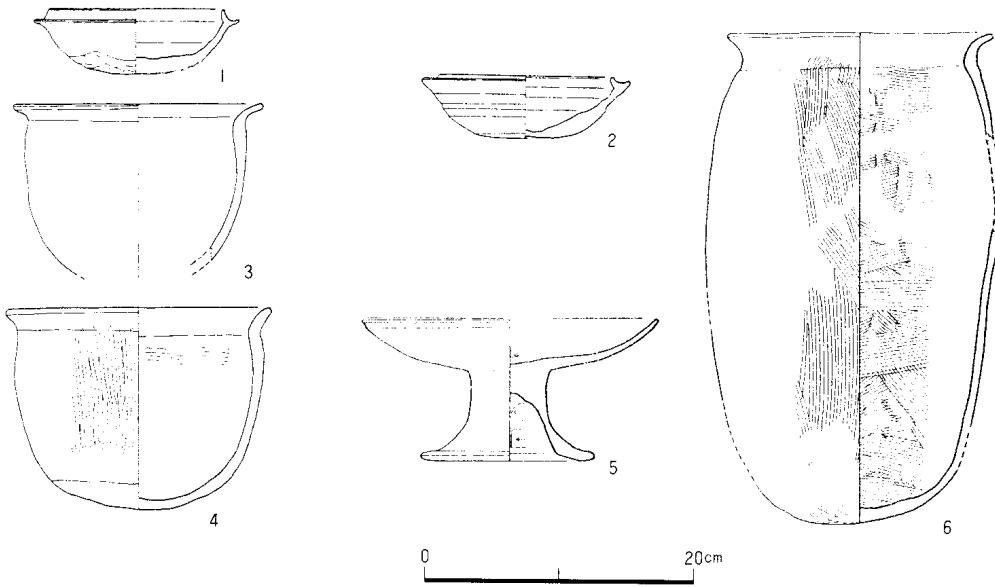
遺物：石器：紡錘車（墓道）

石室内は巨石を立て据えて、その上に一段の石積みを行って天井石を架構する。

床前面に角礫を敷きつめるが、その上にさらに小礫を置く。

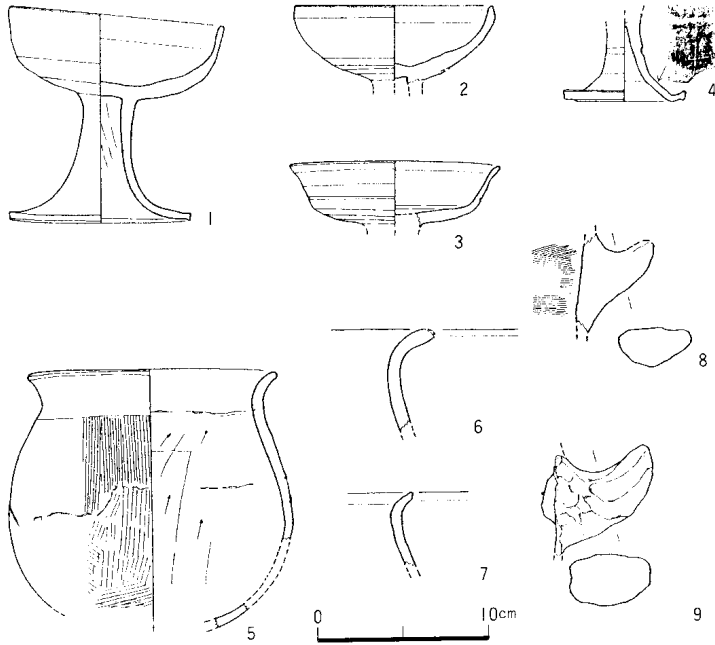
のように見えるが、石積み手法を変えており、袖石の意識は窺える。

第68図 SX2出土土器実測図（一部）



1、2 杯身 3、4 甕（土師器） 5 高杯（土師器） 6 甕（土師器）

第69図 SX3出土土器実測図



1 高杯 2~3 高杯 (一部) 4 高杯 (脚部) 5 甕 (土師器)
6~7 小片 8~9 甕取手部

(祭祀遺構) SX2: 長辺九^寸、短辺五^寸・二^寸の長方形プラン。地山掘削の最深部(床面)は一^寸に及ぶ。
北辺やや内側に四個の礫を「コ」字形に組んだ幅〇・七五^寸の竈がある。石組み中央は被熱して赤変硬化し、中央で押しつぶされた土器が見られた。
遺物: 竈周辺で多くの土器が出土。
須恵器杯身二点、土師器甕・高杯・甕(第68図)

(祭祀遺構) SX3: SX1の北端近く。四^寸・八^寸×三^寸、深さ〇・六^寸の楕円形。
遺物: 石器・砥石
須恵器高杯四点
土師器甕・甕(把手あり)(第69図参照)
考察: 古墳群の位置する谷の入り口部分にあることも勘案するならば葬送儀礼の中で一定の役割を果たした遺構であろう。出土土器は七世紀初頭ごろを示し、3・4号墳の築造時にはほぼ一致する。土器群は床面直上で同時廃棄を示す。
参照)

考察: SX1、SX2とともに時期的にも性格的にも一連のものとしてよからう。
※祭祀遺構の性格について、調査主任の泉文化課技師飛野博文氏は次のように述べている。

SX1とSX3のうち、中核となる遺構はSX2であろう。ここで特記すべきは竈を有すること、土師器甕や甕が多いことである。葬送儀礼の中で神人共食あるいは黄泉戸喫なる儀式が復元されているが、ここで検出した一連の遺構はそれに関連するものと考えられる。すなわち、SX2の石組み竈で調理された食物を須恵器杯等に配分し、会葬者と被葬者が分かちあい、被葬儀者のそれは石室あるいは墓道へ配置する。炊爨に用いた土師器甕・甕や共食に用いた須恵器類は「はかみち」にそったSX1・SX3へ廃棄したものである。これが「残屑」に相当するものか、どうか、いま一つ根拠に乏しいが、出土土器から見て飲食物供献の最後の場であったことは認めてよい。

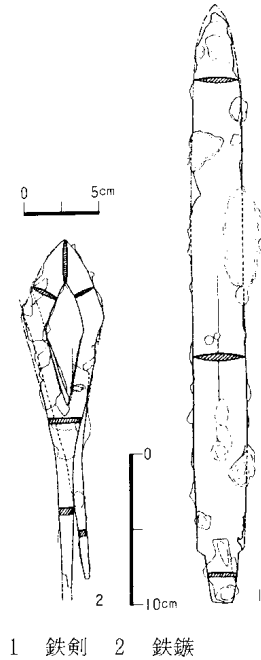
出土遺物に年代幅があまり認められないと先述したが、この葬送に供した家屋で幾人の被葬者に幾度の儀礼を行ったのかという点には大きな関心がある。……: 検出した遺物に形式差がさほど認められないにしても、使用を一度に限るとは考えられず、時期を違えて幾度かの

祭祀が行われたはずである。その回数を知る術もないが、ただ甌の量（個体識別はできないが、把手総数一八点）は一つの目安となろう。（犀川町教育委員会「木山平遺跡」犀川町文化財調査報告書第二集 一九八八より要約・引用）

山鹿古墳

本古墳については「地域相研究」第九号（一九八〇・一一）に中井研治氏（現北九州市門司区萩丘小教諭）によって紹介されたものである。円墳の残欠（復元径約一〇m）、高さ約二mで、主体部は石棺系石室（長さ約二m、幅約五〇cm）、墳丘は円礫の葺石で覆う。鉄剣と鉄鏃が出土しているが、墳丘から円筒埴輪も採集したという。なお所在地は山鹿であるが、どの古墳かを筆者に問い合わせたが特定できなかった。（第70図参照）

第70図 山鹿古墳出土品



(四) 調査された犀川町の古墳時代住居跡

タカデ遺跡

本遺跡は犀川町木井馬場北辺の祓川右岸に位置する。遺跡発見の端緒は木井地区の圃場整備事業に先立つ平成元年（一九八九）度からの同地区の発掘調査によるものであった。祓川はこの遺跡から見ると、西側約一〇〇mのところを流れているが、こ

の川の旧流路によって堆積形成された微高地に礫群をさけて住居群が形成されていた。調査は削平される部分をA・B・Cの三地区に分けて合計四〇〇坪について行われた。調査された住居跡群を報告書に従って表にすると次ページのようになる。（第11表参照）

△本遺跡のまとめ▽

この遺跡の住居群は、古墳時代の中期から後期・終末期にかけてのものと考えられている。

・中期の住居：三十一・三十四・三十六・三十七号

※三十一号は五世紀前半代 三十四・三十七号は五世紀中葉から後半代

紀中葉から後半代

・後期～終末期：A区の大半の住居がこの時期におさまる。もっとも古くて六世紀の新しいところ、最も新しいものは七世紀（七世紀前半代のなかで集落がとぎれるのではないかと調査者は考えている）。

末江遺跡

（犀川町教育委員会「城井遺跡群」犀川町文化財調査報告書第三集一九九二より）
犀川盆地を貫流する今川の支流である末江川沿いに広がる狭長な谷底平野の最奥部に位置する。遺跡は末江地区の圃場整備に先立って平成四年八月から五年二月にかけて行った発掘調査により発見されたものである。A・B・C三区に分けて調査されたが、A区が小丘陵であるほかは山沿いの緩斜面の地形をなしている。

出土した古墳時代の遺構は住居跡一〇軒、土壇三基、古墳二基とピット群である。出土遺物は多くの須恵器・土師器のほか土製品（模造鏡・ミニチュア土器）が出土している。そのほか、古墳の一基からは耳環四と少量の鉄製品が出土した。古墳時代後期の遺跡と考えられる。

第11表 タカデ遺跡出土住居跡一覧

住居跡	床面長さ (m)	プラン	カマド	出土遺物
1号	3.5×3.7	方形	北西辺中央	土師器鉢・甌、石斧片、スラッグ1
2号	4.7×4.4	長方形	北辺のち西辺へ	――
3号	4.7×4.3	正方形	――	須恵器蓋、土師器甌、台石
4号	3.5×3.4-3.7	方形	北辺	須恵器杯・高杯、石斧1
5号	4.1×4.5	方形	――	――
6号	一部残存	方形	――	――
7号	一部残存	――	――	――
8号	3.2×3.2	正方形	北辺中央	須恵器甕、土師器碗、青白磁合子
9号	4.6×4.6	正方形	北辺中央	須恵器杯、土師器壺片、器台(てづくね土器)
10号	5×4.5	方形	北辺やや西寄り	須恵器杯・壺片、土師器甕片
11号	5.4×3.75	長方形	西辺中央	――
12号	28-35×3.65-4.2	台形	北辺中央	――
14号	4-4.75×5	台形ぎみの長方形	床面中央より東寄り	須恵器杯、土師器高杯・甕
15号	3.4×3.4	正方形	――	須恵器杯片、土師器甕片
16号	2.4×3	長方形	――	――
17号	3.5×3.5	平行四辺形	――	――
18号	南北4.3	――	北辺中央	――
19号	一部残存	――	――	土師器甕片
20号	一部残存	――	――	須恵器横瓶片か
21号	3.25×3.9	長方形	南片中央	――
22号	確認できない	――	――	土師器甌片か
23号	4-4.2×4	方形	北辺中央	須恵器杯・高杯片・甕片、手づくね小型鉢、土師甕片・甌片
24号	一部残存	――	――	――
25号	一部残存	方形	――	――
26号	4.5×3.1	長方形	北辺中央	土師器甕か甌
27号	3.1×3.3	――	北辺中央	――
28号	3.1×3.2	――	西辺中央	――
29号	一部残存	――	――	――
51号	一部残存	――	――	土師器甌
52号	3.8×3.7	――	西辺中央	鉄器(ノミか)
31号	4.1×5	長方形	――	須恵器碗、土師器碗など
32号	2.9×3.1	方形	北辺中央	土師器甕、土鍋
34号	6.1×6.1	正方形	――	須恵器杯・壺(か)・甕片、土師器碗
36号	4.8-5.6×5.3-5.5	方形(台形ぎみ)	――	土師器碗・甕片
37号	5×6(復元で)	――	――	須恵器杯、土師器碗・高杯片

第12表 犀川町の古墳および古墳時代の遺跡

地図 番号	古 墳 名	所 在 地	古墳の形	古墳の内部	古墳の特徴・時代その他
1	古川迫古墳群	犀川町大字花熊	円 墳	箱式石棺か	微高小円墳15基以上。5世紀か。
2	地藏院北古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	馬ヶ嶽支脈の丘陵上の2基。
3	浦山古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	墳丘はかなり破壊されるが、石室は残る。
4	平原古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	大円墳2基。6世紀後半か。
5	上の谷古墳	〃 〃	円 墳	横穴式石室	墳丘は完全に破壊されているが、石室はよく残る。
6	御所園古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	直径20 [㍎] 、高さ4 [㍎] の大円墳2基。
7	キジガウチ古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	キジガウチ台地頂上の大円墳2基。6世紀後半か。
8	馬場山古墳群	〃 〃	円 墳	?	小円墳5基。内部主体は箱式石棺か。
9	椿山古墳	〃 〃	円 墳	横穴式石室	墳丘も石室も大きく破壊される。
10	三ツ塚古墳群	〃 〃	円 墳	?	三ツ塚丘陵上に4基の古墳群。三基は周濠がめぐる。
11	木山平古墳群	〃 〃	円墳ほか	横穴式石室 石棺系石室	
12	姫神東古墳	〃 〃	円 墳	内部不明	径約15 [㍎] 、高さ約4 [㍎] 。6世紀前半。
13	姫神古墳	〃 木山	前方後円墳	不 明	全長約30 [㍎] 。後円部に石室抜き取り穴。6世紀後半。
14	オクガ迫古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	周濠のある大円墳一基と小円墳6基からなる。
15	オクガ迫北古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	3基の古墳群、中央の径20 [㍎] の古墳は半壊。
16	宮ノ谷北古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	墳丘径約15 [㍎] の円墳3基。石室の残存良好。
17	宮ノ谷西古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	墳丘が半壊された2基の古墳が残存する。
18	正大寺古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	4基の古墳群であるが、ほとんど破壊されている。
19	富塚古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	御所ヶ谷南山麓にある3基の大円墳。
20	浦田池東古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	池の東山麓に7基以上の古墳群。石室・墳丘残存良好。
21	小松原古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	山麓の5基以上の古墳群。残存状況良好。
22	烏池西古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	烏池西岸に迫る福六山地の尾根上の5基の単室小円墳。
23	福六古墳	〃 〃	円 墳	横穴式石室	福六山地の尾根上の一基。単室。
24	木山古墳群	〃 〃	円 墳	横穴式石室	5基の古墳群。封土は低く、うち1基が開口、単室。
25	松坂東古墳群	〃 松坂	円 墳	横穴式石室	5基の古墳群。平成5年に土取りで消滅。
26	大無田古墳群	〃 谷口	円 墳	横穴式石室	4基のうち1基消滅、他の1基は墳丘半壊、石室大破。

第1章 先史・原史時代

27	神手ヶ池北古墳群	犀川町大字谷口	円墳	横穴式石室	池周辺の大古墳群で40基以上。
28	谷口古墳群	〃	円墳	横穴式石室	3基の古墳群、昭和49年消滅。
29	神手ヶ池南古墳群	〃	円墳	横穴式石室	6基の円墳、うち2基は未掘墳。
30	貴船古墳	〃	円墳	?	貴船神社境内にあり、低い墳丘。5世紀代?
31	ソウエンダ古墳群	〃	円墳	横穴式石室	3基の古墳群、墳丘は削平され、石室大破。7世紀?
32	コンヤ塚原古墳群	〃	円墳?	横穴式石室	墳丘の低い20基以上の古墳群。終末期に近い。
33	上大村古墳群	〃	円墳	横穴式石室	尾根と山腹に8基の古墳が散在。6—7世紀。
34	上大村古墳	〃	前方後円墳	横穴式石室	石室は後円部に開口。
35	崎山大塚古墳	〃	円墳	横穴式石室	墳丘なく、石室残欠のみ露出。
36	イカリ古墳	〃	円墳	横穴式石室	残欠
37	鳥番古墳	〃	崎山円墳	横穴式石室	須恵器、鉄剣出土。
38	二反田古墳	〃	円墳	不明	今川沿い最南端部の古墳。未掘墳。
39	中林古墳群	〃	大熊円墳	横穴式石室	7基の古墳群。6世紀後半から7世紀。
40	大熊南古墳	〃	円墳	不明	墳丘約30m。墳頂部は平坦。
41	大熊北古墳群	〃	円墳	横穴石室が多い	大熊山頂から台地上に30基以上の大古墳群。6世紀から7世紀にかけて。
42	大熊古墳	〃	前方後円墳	不明	大熊山の東北平成鉄道沿いの丘陵上。後円部破壊。全長約30m。6世紀後半。
43	山鹿古墳群	〃	山鹿円墳	横穴式石室	27基からなる古墳群。未掘墳も多く、内部主体もわからないものもあるが、盗掘や破壊されているものは横穴式石室である。マウンドの低いものは箱式石棺かもしれない。
44	城山古墳	〃	円墳	横穴式石室	2基の古墳。石室は単室。
45	本庄池北古墳群	〃	円墳	不明	20基以上の古墳群であったが、土取りや道路工事などで消滅し、現存は5基。石室の抜き取りが多い。6世紀から7世紀にかけて?
46	本庄古墳	〃	本庄前方後円墳	不明	本庄墓地の西側台地上。後円部は破壊され、石室が抜き取られている。6世紀代。
47	長迫古墳	〃	久富円墳	縦穴系横穴式石室	短甲・鉄剣など出土。5世紀後半。
48	古川大塚古墳	〃	古川円墳	内部不明	未掘墳。墳丘径40mの大円墳。
49	クシガ迫古墳群	〃	下高屋円墳	横穴式石室	4基のうち3基消滅。現存の1基は半壊。
50	末江古墳・住居跡	〃	末江円墳	横穴式石室	2基の古墳、ともに墳丘削平。耳環、鉄器出土。
51	照安寺古墳群	〃	木井馬場円墳?	横穴式石室	6基の古墳群、墳丘削平。
52	上明神古墳群	〃	〃	横穴式古墳	2基残存。7世紀?
53	ゴウヤベラ古墳群	〃	犬丸円墳	横穴式石室	3基の古墳群。7世紀?
54	タカデ遺跡	〃	木井馬場	縦穴住居跡	37軒